

ころから泥の表面に移行する傾向が高いことが解りました。頑丈なくちばしを持つキョウジョシギ、体が大きくて長く湾曲したくちばしを持つチュウシャクシギは共に岩場を利用していましたが、キョウジョシギは岩場の表面、チュウシャクシギは岩の隙間からカニなどの大型の餌を利用していることが解りました。チドリ類では、小型のシロチドリが同じ体型のトウネンと同じ環境を、大型のダイゼンはキョウジョシギ・チュウシャクシギと共に岩場を利用していました。

考 察

標準的な体型のシギ類3種、キアシシギ・ハマシギ・トウネンでは、足・くちばしの長いものが干出した干潟の汀線の水側を、足・くちばしの短いものは汀線の陸側を利用し、同時的な餌による競合をさけるために干潟を「棲み分け」によってうまく利用しているようでした。特殊なくちばしを持ったキョウジョシギ・チュウシャクシギでは、前述した3種とは違う環境を利用し、それぞれのくちばしの特徴を活かした「食い分け」を成立させているようでした。また、チドリ類では、小型のシロチドリがトウネンと同じ環境を、大型のダイゼンはキョウジョシギ・チュウシャクシギと同じ環境を利用していましたが、シギ類ではくちばしの触覚で餌を探すのに対し、チドリ類では視覚で餌を探すため、結果的に餌の種類を変えているかもしれません。

以上の結果は、シギ・チドリ類が、春と秋の渡りの短い期間に、それも干潟が干出している短時間に、多くの種が餌の競合をさけて共存できるよう、この干潟を舞台として、体の大きさ・足の長さ・くちばしの形・採食法などを進化させたということを表しているのではないかと考えています。